山内担当　実験授業レポートにおけるルーブリックに基づく評価表

評価区分		評価法		評価項目・評価内容の参考					区分満点
全体的体裁[1]		加点法 配点		表紙 1	項目 1	様式 1	文体 1	綴じ 1	5
結果[2]	図表	加点法 配点		表現・種類 3	タイトル 2	ラベル 2	デザイン 2	注釈説明 2	11
	文章	10段階評価		結果の図表から読み取った事実のみ（考察を含まない）を的確に記述しているか。					10
考察[3]	体裁	加点法 配点		段落構成 3	様式 3	文体 3			9
	内容	10段階評価		結果から読み取った事実や予測された結果，参考内容等に基づいて，論理的に適切に考察されているか。また，適切に引用・参考箇所を明示しているか。					10
参考文献表示[4]		加点法 配点		表示様式 2	統一性 1	文中明示 2			5
受理の可否		減点法		レポートとして受理に相当しない場合を含めて，上記で反映しきれない不備・減点事項（処理すべき結果の図表が不足している等）がある場合は，1事項につき10点を最大として減点する。					－
								合計＝ 50 点	

※基準締め切り（原則として次回の授業前）を超過した場合は「遅延レベル１」として，一定の減点とする。
　さらに，別途設定する2段階目締め切りを超過すると「遅延レベル２」として，「遅延レベル１」の基準減点×2点を減点し，最終締め切り以後は受け継ない。また，指定された提出場所に提出しない場合も受け付けない。

※全レポート点の合計÷（50点×レポート回数）×100に最終評価レポート配分係数（60%）を乗じる。
　なお，最終評価（取り組み姿勢40%＋レポート評価60%）の時点で，成績区分の構成割合等によっては，左の合計点に一律の単純係数を乗じるため，若干増減する可能性がある。

［毎回のレポート評価の状況による最終評価の例］
　毎回のレポートについて，評価完了の都度授業時に評価点区分で一覧表示を行う（評価点区分：15点未満＝警告，15～30点未満＝注意，30点～40点＝○，40点以上＝◎）。そのうえで，取り組み姿勢点が40点（無欠席かつレポート未提出なし）と仮定して，全レポートが注意レベルの下限（15点）であったとすると，最終係数なしの場合58点となる（レポートの平均評価得点率が33.4%で最終評価の粗点は60点となる）。

【ポイント】

1）表紙を的確に作成（最低限，授業回・授業名・学部学科・学籍番号・氏名が必要）。本体の項目は，目的・方法・結果・考察・（課題）・参考の順とし，それぞれ項目名を明記する。様式は，表紙＋本体とし，フォントサイズや文字間隔，行間を見栄え良く設定し，文体は「である調」で統一する。最後に左上をホッチキスで閉じる（無針綴じは，提出されて重なると外れることがある）。

2）指示されたデータ処理等に応じた図表が必ず必要である。グラフにするか表にするかは自由であるが，レポートはプレゼンテーションであるため，より的確な表現になるように（とくにグラフは，棒グラフにすべきか折線グラフにすべきかなどに注意）作成する。図表には的確なラベル（項目表示）を行い，罫線なども含めて見栄えを意識したデザインとする。また，とくにグラフにおいては的確な注釈が必要である。
さらに，結果は図表のみで終了するのではなく，その図表から読み取れる事実（数値や図の形状）を的確に記述する。

3）レポートで最も重要なのは考察である。正しい文章構成（一文字下げた段落構成）はもちろんのこと，提示した結果全てに関連して分かったこと（分かること）や考えられることを論理的に記す必要である。このとき，事前に予測された結果や理論と比較してどうだったのかも考察する必要がある。そのためには，相応の参考文献等が必要である，このとき，引用部分には参考文献の番号を必ず付して明示しなくてはならない。

4）目的・方法・考察などで明示した箇所の参考文献情報を一覧できるよに明記する。このときに必要な情報（著者，タイトル，雑誌・書籍名，巻・号・班，ページ範囲，発表年，書籍の場合は出版社名，Webの場合はURLアドレスと最終閲覧日など）の順番は特に決まりはないが，1つのレポートで統一された順序や表記にする必要がある。